－平成23年度　現地見学会資料－

おぐらはらにし 小倉原西遺跡の発掘調査

平成23年10月29日（土）

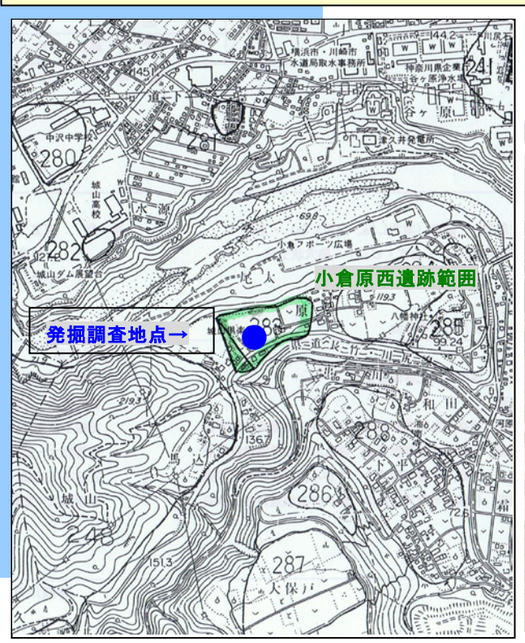
公益財団法人 かながわ考古学財団

◎はじめに

神奈川県相模原市緑区の小倉地区では、国道 468 号（さがみ縦貫道）建設に伴う事前の埋蔵文化財調査として、小倉原西遺跡（相模原市№283 遺跡）の発掘調査を行っています。この調査は国土交通省関東地方整備局の委託を受け、公益財団法人かながわ考古学財団が実施しています。現地での発掘作業は 2010（平成 22）年 11 月中旬から開始し、2011（平成 23）年末に終了する予定です。今回の現地見学会開催にあたって、参加者の皆様に、これまで本遺跡で発見された遺構や遺物に実際に接していただきたいと思います。

◎遺跡の立地と時代

小倉原西遺跡は相模川の右岸に形成された河岸段丘の上に立地しています。本遺跡では、2010（平成 22）年 7 月に神奈川県教育委員会が試掘調査を行った結果、縄文時代・中世（鎌倉～戦国時代）・近世（江戸時代）の遺構と遺物がみられ、遺跡の時期が長期にわたることを確認しました。今回の発掘調査でも、更に古い旧石器時代の石器集中地点が見つかり、各時代の間に連続性は見られないものの、約二万年前頃から陸地化し、人々の活動に適した環境であったことがわかりました。



小倉原西遺跡発掘調査状況

◎小倉原西遺跡から出土した遺物

小倉原西遺跡の発掘調査では、それぞれの時代の遺構から特徴的な遺物が出土しています。

旧石器時代の遺物としては、緑色凝灰岩や安山岩で作られた、礫器・尖頭器などの石器が出土しました。縄文時代の遺物は、土器・石器が出土しています。土器は、早期～後期に帰属する深鉢の破片がみられ、中でも早期（条痕文系土器）・前期（関山式・諸磯式）・中期（勝坂式・曽利式）・後期（堀之内式・加曽利B式）の土器深鉢が多く認められます。また石器は打製石斧、磨石・敲石、石鏃などがみられます。

近世（江戸時代）の遺物は、18 世紀代以降の肥前系磁器や瀬戸美濃系陶器の碗など、食器類の陶磁器が出土しているほか、江戸時代に入ってから鋳造された「寛永通宝」という古銭などが出土しました。これらの時代において、小倉原西遺跡では居住・耕作・墳墓など各種の用途とみられる遺構が検出され、時代毎に様々な目的で利用された土地であったことが判明しました。その実態と詳細の解明については、今後の発掘調査の課題であると考えています。

旧石器時代 礫器出土状況

縄文時代 土器出土状況

縄文時代 石鏃出土状況

― 平成23年度　現地見学会資料 ―

小倉原西遺跡の発掘調査

発　行　日：2011（平成23）年10月29日

編集・発行：（公財）かながわ考古学財団

〒232-0033　横浜市南区中村町3-191-1

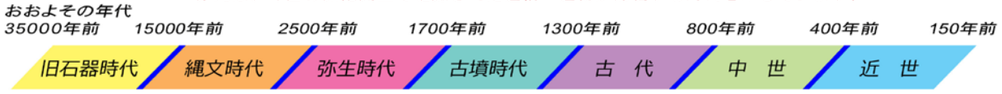
Tel:045-252-8689

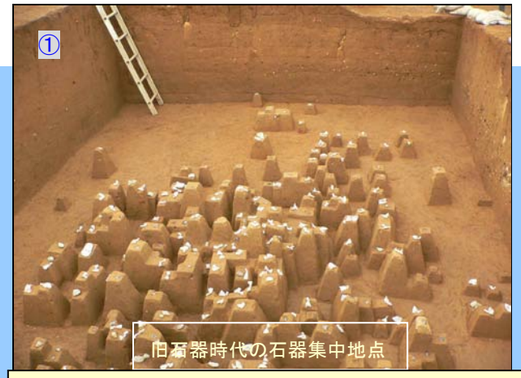
Fax:045-261-8162

e-mail:kaf@kaf.or.jp

http://www.kaf.or.jp/

＊赤丸は、今回の発掘調査で確認された遺構・遺物が帰属する時代を示しています。





旧石器時代の石器集中地点

ローム層の中から、５～６ｍ程度の範囲に集中して石器が大量に見つかりました。黒曜石製のナイフ形石器や、石器を製作するときに生じる剥片類が出土しました。

縄文時代の竪穴住居址

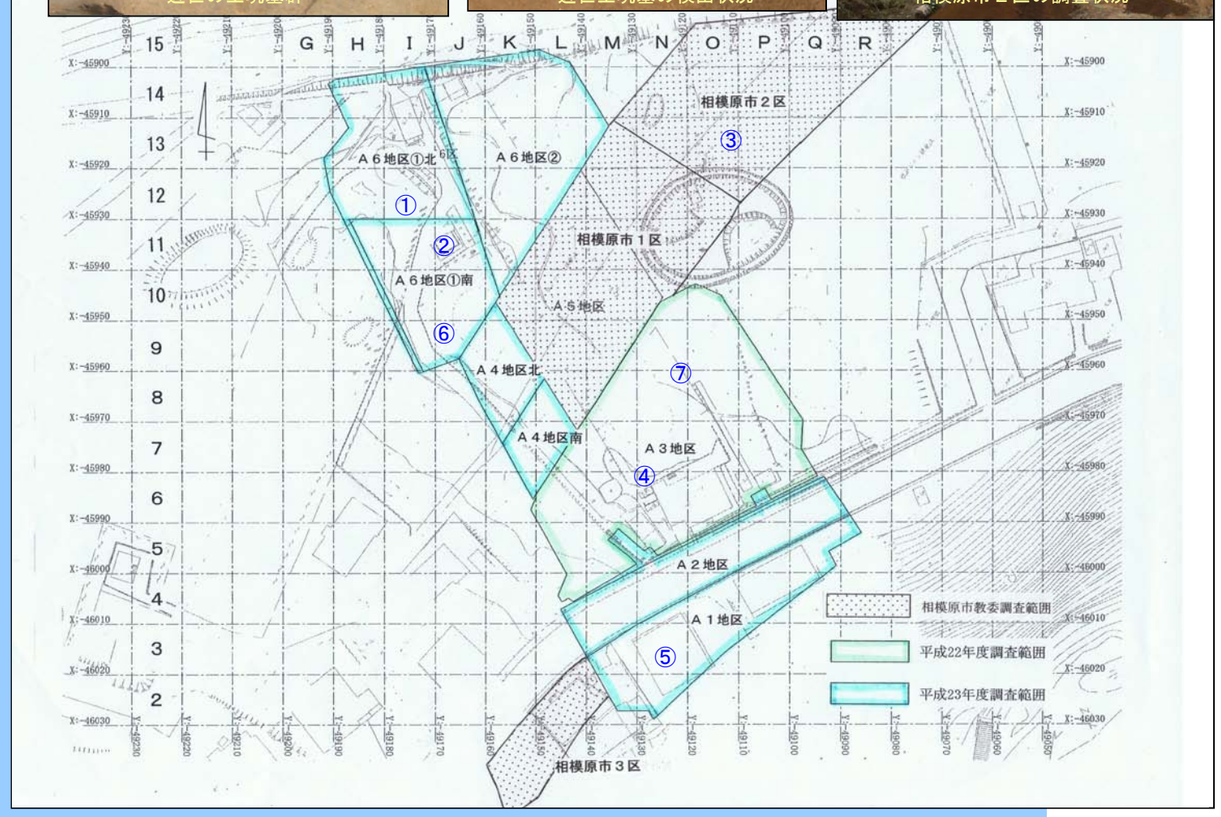
竪穴は隅円長方形を呈し、中央には火を使った炉の痕跡が見られます。床面からは土器の破片が出土し（写真上）、柱穴なども検出できました（写真下）。

縄文時代竪穴住居址の掘り方

近世の土坑墓群

近世土坑墓の検出状況

相模原市２区の調査状況

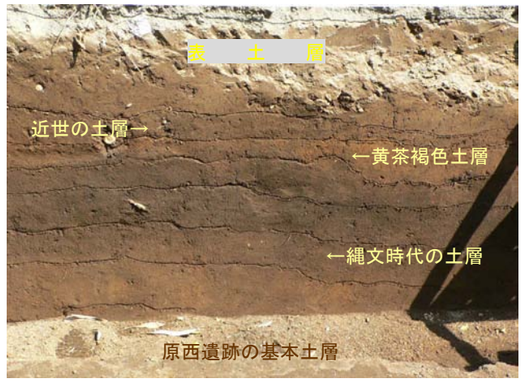


Ａ１地区の遺構群

縄文時代の陥穴

陥穴は獣を捕らえるため掘られたもので、同じ様な標高の場所に連続して掘られます（写真右）。

落ちた獣を動けなくするため、杭などを刺す複数の小穴が底面にみられます（写真左）。



本遺跡の土層は、ローム層→粘性の強い茶褐色土（縄文時代）→火山灰を多量に含む黄茶褐色土→褐色の耕作土（近世）→表土層の順に堆積しています。

縄文時代の集石

人拳大の礫を集積させた遺構を総称して集石といいます。縄文時代のものは、熱した礫と共に肉などを入れ、蒸し焼き料理をした痕跡と考えられています。

縄文時代の陥穴群